8. 三人組と二人の魔法使い

敦賀市立黒河小学校
６年　岡田 瑞季　　木村 ちはる　　谷口 魁
辻子 莉佳子　　深見 大和　　松本 有季恵
↓
各務原市立鵜沼第一小学校
５年　三浪 真友華　　中山 知沙

「移動魔法、ムーブマジック」
　と、鷹が唱えたしゅん間、鷹が乗っていたホウキが動き出した。
「イックゼー」
「まってろよ、夏美ーー」
　魔法界にいた魁と鷹は、人間界に向かった。
「もうすぐ人間界に着くぞー」
　と、魁と鷹が言ったとたん、鷹のホウキが、「ボキッ」と折れた。移動魔法は鷹しか使えないので、同時に魁のホウキも折れた。
　二人は、人間界へ真っさかさまに落ちていった。
　そのころ人間界では、夏美と佳恋と凌大が、街を歩いていた。
　すると空から何かがふってきた。凌大が上を見上げたしゅん間、凌大の頭に二本のホウキが当たった。
「いってえー」
　凌大が頭をさすっていると……、
「うわあーー落ちるーー」
　と上から声がした。凌大が上を見上げたとたん、魁と鷹が凌大の上に着陸した。
「ナイスクッション！」
「何がナイスクッションじゃ！」
　と凌大はいかりに満ちてさけんでいる。すると、魁と鷹はいやそうにあやまった。
「はいはい、すいませんでしたあ～」
　と言うと、二人は夏美の家ににげこんだ。凌大はいかりくるいながら、すごい顔をして追いかけてきた。
　夏美の家に着いた魁と鷹は、夏美のクローゼットにかくれた。凌大の後を夏美と佳恋が追ってきた。三人は夏美の家に着いた。そして、家の中を三人で探し回った。とうとう魁と鷹が凌大に見つかった。
「うわあ、とうとう見つかっちまったーー」
「やべえ」
　と魁と鷹があわてて言った。
「もう、ぜってえゆるさねえーー」
　凌大がおこりながら言うと、

「鷹、変身魔法を使え！」
「ビバチョロオッケーだぜ！」
「変身魔法、ニャンニャンネコちゃん」
　鷹が唱えたと同時に、凌大が二人になぐりかかろうとしたとたん、二人はネコになっていた。凌大はとめようとしたけれど、勢いが止まらず、かべに思いっ切りパンチしてしまった。
「いってえーー」
　凌大の手は、真っ赤にはれあがった。
「どこに行きやがったんだ。なめやがって。ふざけんなよ！」
　凌大は、めちゃくちゃにおこっていた。
「オレ達は、ここに居ますけどーー」
　どこからか魁と鷹の声がした。
「はあ、あの二人、どこにいんだよ！」
　凌大はおこりながら探している。
「ニャンニャンネコちゃんのパワーを見ろ、おりゃ」
　魁が凌大の顔をひっかいた。
「いってえー、だれだよーー」
　と凌大が言った。
「オレだよ」
　ネコに変身した魁が言った。
「何でネコがしゃべってんだよ！」
「魔法だからにきまってんだろ、バーカ」
「バカとはなんだ、バカとは。って言うか、何で魔法使えんだよ」
「魔法使いだからに決まってるでしょ」
　と佳恋が口をはさんだ。
「何で佳恋が知ってんだよ」
「あら、知らなかったの。わたしが一年前、車にひかれそうになったところを、鷹が魔法で助けてくれたのよ」
　と、夏美が説明した。
「そのとき夏美、鷹君のこと、好きになっちゃったんだよね」
　と、佳恋がうれしそうに言った。
「ああ、あのとき、一目ぼれしちゃったんだもんね」
　夏美がはずかしそうに言った。
「と言うか、今気付いたんだけど、名前なんつうの。オレは凌大」
「オレは魁で、こいつは鷹っつうんだ」
「ところで、鷹は夏美に会いに来たんじゃねえの」
　と魁が言った。
「あっ、そうだった。凌大のせいで、わすれちまったじゃねえか」
「はあ、オレのせいかよ、まあいいか」
　と凌大が言った。そして、いきなり鷹は夏美にだきつきながら、

「夏美、会いたかったぜーー」
　と好き好きオーラを出しながら言った。
「いつでもどこでもラブラブしてんじゃねえーーよ」
　と魁と凌大が言った。
「ところでさあ、魁と鷹は、どんな魔法が使えんの」
　凌大が二人に聞いた。
「オレが使えるのは、変身魔法と睡眠魔法と移動魔法だぜ」
　と、鷹はいばって言った。
「オレは、呪符魔法と破壊魔法とロリポップ魔法が使えるんだぜ」
　魁が自まん気に言った。
「ロリポップ魔法って何なんだ？」
「ロリポップ魔法っつうのは、キャンディーをいくらでも出せる魔法のことだぜ」
「へえーー、そうなんだ。なんかうまそうだな」
　凌大は、よだれをたらしながら言った。
「そうだろーー」
　うれしそうに、二人は声をそろえて言った。
「オレも魔法が使えたらなあーー」
　うらやましそうに凌大が言った。
「オレらが教えてやろっか？」
　と鷹が言った。
「ええーー、マジで教えてくれんの、ラッキーー」
「ちゃんとついてこいよ」
　と魁が言った。
　夏美と佳恋は、だまって三人の会話を聞いていたが、あまりにもかまってもらえなかったので、
「もう帰る」
　とおこって、佳恋の家へ走って向かった。夏美の家に残された三人は、どうしようとおろおろしていた。
「まあいいか。とにかく特訓するぜ！」
　と魁が言った。
「おう。ところで、どんな魔法を使えるようになるんだ」
　と凌大がたずねた。
「さあ、お前の実力しだいじゃねえ？」
　と魁が、意地悪く言った。
「まあ、とにかく一番簡単にできるロリポップ魔法からやろうぜ」
　と鷹が言った。
「ああ、キャンディー出すやつか。おもしろそうだな」
　と凌大が言った。
「まず、キャンディーを出すぜえ！　って気合いをこめて、『ロリポップ魔法、あまあまラブリーー！』って、言ってみ！」

　と魁が言った。
「ええ、そんなこと言うのーー。オレやだよ」
　と凌大は、いやそうに言った。
「何言っとんじゃ。はずかしがってたら、魔法なんて一生使えねえーぞ」
　と魁と鷹は口をそろえて言った。
「じゃあ、さっさとやれ！」
　と魁がどなった。
「分かったよ」
「よし、やれ！」
　と鷹が凌大に命令した。
「よし、やるぞ！」
　凌大が気合いを入れた。
「ロリポップ魔法、あまあまラブリー！」★
　凌大が、魔法の呪文を唱えたとき、いきなり雨が降り出した。
「やべっ、雨が降り出した」
「本当だ。どうしよう」
　と言って、鷹と魁はあわてて空を見上げた。
「なんで？　雨なんて降ってないじゃないか」
　と言って、凌大も空を見上げた。
「あれっ、おかしいな。おれのところは、雨じゃなくてキャンディーが降ってくるぞ」
　凌大の頭の上には、七色の小さなキャンディーがまるで雨のように降っていた。
「やったあ」
「成功じゃん」
　と魁と鷹が言った。
「やったあ、ロリポップ魔法が使えた。ねえ、もっと魔法を教えてよ」
　凌大はうれしそうに言った。すると魁と鷹は声をそろえて、
「じゃあ、一緒に魔法学校へ行って僕たちの先生に教えてもらおうよ」
　凌大は二人の話にびっくりして目を丸くした。
「まじでいいの？　じゃあ、夏美と佳恋を呼んでくるよ」
　三人は鷹のほうきに乗った。
「全員乗ったな。出発するよ」
　魁が呪文を唱えると、三人を乗せたほうきは魔法界へ向けてどんどん進んでいった。

　魔法界についたとたん、魁と鷹は青くなった。
「あっ、先生が怒っている」
「またおしおきが始まるぞ」
　こちらをにらみつけるようなするどい目をして、口を力強く結んで、足を開き、手を腰に当てたこわそうなおじいさんが立っていた。
「あのおじいさんはだれ？」
「ぼくたちの先生だよ」

「どこに行っておったのじゃ。探しておったぞ」
　こちらをにらみつけながら、大きな声で先生が言った。
「すみませんでした。友達に会いに行っていたんです」
「人間界に遊びに行っていました。もう勝手に外出はしません」
　そう言って二人は頭を下げながらあやまった。
「反省しているようじゃな。では許してやろう」
　二人はほっとした顔をして言った。
「ありがとうございます。もう二度としません。ところで先生、この子達に魔法を教えていただけないでしょうか。僕たちの友達なんです」
　三人は声をそろえて、
「お願いします」
　と頭を下げた。フカザキ先生は、
「どんな魔法が知りたいのかね」
　と聞いた。三人は相談を始めた。
「どんな魔法にする？」
「私は、人の役に立つ魔法がいいかな」
　と夏美は言った。佳恋が、
「じゃあ、マナーや言葉遣いが良くなる魔法は？　だって私たちって言葉遣いが悪いから」
　と言った。
「おれもそう思う」
「やっぱりそうだね」
　二人も賛成した。するとフカザキ先生が聞いた。
「レイギ魔法というのがあるが、どうかね」
「はい。その魔法を教えてください」
　三人は何日も練習して、レイギ魔法を使えるようになった。
「魔法を教えていただき、ありがとうございました」
　三人は声をそろえてお礼を言った。とても礼儀正しい言い方だった。
「厳しい練習だったが、よくがんばったな。これからもその努力する力でがんばるのじゃよ」
　三人は人間界に帰ってきた。
「せっかく使えるようになったんだし、さっそく使って誰かを礼儀正しくしてみようよ」
　と凌大が言った。でも夏美と佳恋が、
「ねえ、ちょっと待って。友達が魔法で礼儀正しくなって、凌大はうれしい？　私は何だか嫌だな」
　と言った。凌大はその言葉を聞いてじっくり考えた。
「やっぱり自分の力で礼儀正しくなったほうがいいよね」
「そうだよね」
「魔法なんか使わずに、自分たちの力でがんばっていこうよ」
「やる気になれば何だってできるしな。僕たちでみんなが礼儀正しくなるように声をか

けていこう」
　三人は顔を見合わせて、にっこり笑った。